

〈論 文〉

長野県方言の「たとえ」「ことわざ」「言い回し」

～上田方言を中心に～

出 野 憲 司

1 はじめに

NHKで「21世紀に残したいふるさとのことば」を募集するという企画が行われた。(注1)1999年度から2000年度にかけてのことである。その2年間で全国から寄せられたことばは、約75,000語であったが、最多は長野県の10,882語で、第2位の宮崎県5,122語を大きく引き離していた。しかも長野県ではあまりに多くの投稿があり、1ヶ月程度で募集を締め切ったと聞く。その際に寄せられた数が多い順から挙げると次の通りである。

- 1 ごしたい(ごしてー)＝とても疲れる
- 2 ずく＝精を出すこと
- 3 もーらしー＝哀れみ、同情し救う心根
- 4 いかず＝行こう
- 5 そーずら＝そうですね
- 6 おやげない(おやげねー)＝かわいそう、お気の毒
- 7 われ(わんだれ)＝お前たち
- 8 ほこ＝子ども
- 9 しょーしー＝気恥ずかしい
- 10 てきない(てきねー)＝だるい、やる気がない

この報告から、長野県民の方言に対する関心の高さを窺い知ることができる。また、馬瀬良雄(注2)の次の記述から、方言に対する意識も高いことがわかる。

「信州のことばは東京に近い」「東京へ行っても、すぐ東京のことばになじみ、東京出身者と間違えられる」—信州の多くの地方でこの種のコメントを耳にする。また、一方では「同じ信州でも木曾の南や伊那谷の飯田へ行くと、ことばが優しくなり、どことなく関西弁に似たところが出てくる」、「佐久へ行くとことばが荒っぽく勇ましくなる。ヒトシを間違えるとこ

ろなんか、江戸っ子のことばに近い」などと言い、さらに「長野は県庁の所在地だが、イとエは一緒に、『胃』も『柄』も区別のない人がある。越後とつながっているという感じだ」などの声も聞く。

長野県は、南北に長く、また、県歌「信濃の国」に歌われているように「十州に境連ぬる国」である。さらに東日本方言地域に属しているものの、その西側の境界に位置し、西日本方言地域と接しているという特別な地域であるがゆえの関心または意識であると言えよう。一方、清水はるな氏によると、長野県方言の代表的な俚言のひとつである「ずく」を使うと回答した中学生は30%程度にとどまるという。(注3)

いわゆる伝統的な方言の使用率の低下は、中学生に限らず高齢者にも及ぶものである。地理的に東京に近いがゆえに、言語的な特徴も東京に近く、共通語化が進みやすい地域とも言えるのかも知れない。この傾向は、今後もさらに進むものと予想する。同時に、地域独特の「たとえ」「ことわざ」「言い回し」も使用率は加速度的に低くなり、忘れられてしまうことも予想できる。

近年、失われつつある方言を後世に残すべく、方言辞典や方言集、あるいは、方言かるたなどを作成する動きが目立つ。しかしながら、「たとえ」「ことわざ」「言い回し」についてはどうだろうか。これらは生活に密着したものが多かったり、文化を髣髴とさせるものが多い点からも、体系的な記述がなされるべきである。

本稿は、体系的な記述には遠く及ばないが、これらの一端を示すものとしての試行的な記述である。

1.1 「たとえ」

「たとえ」は国語教育の中では、「比喩」として扱われるものである。「比喩」は『岩波国語辞典第7版新版』によると、「物事の説明や描写に、ある共通点に着目した他の物事を借りて表現すること。たとえること。その表現。」とある。つまり、「他の物事を借りて表現する」ことで、よりわかりやすく、また、よりその真実に迫れるという効果が期待できるということである。

それには、普段の生活との結びつきの強さが必要となる。同一の社会集団における理解が取りやすいことが必須であるためだ。雪のない地域で「雪のような白さ」と表現してもある程度は伝わるだろうが、「雪のように恐ろしい」という表現は、ホワイトクリスマスに憧れている人には伝わりにくいだろう。

A rolling stone gathers no moss.(転石苔むさず)が、イギリスとアメリカではまっ

たく反対の意味に解されると聞か、たとえ(あるいは比喩)が文化と密接な関係にあることの証左と言えよう。

1.2.1 「火の気のないこたつ①」

まずは、「火の気のないこたつ」に注目した経緯を説明しておく。筆者は、2010年より2018年まで、信濃毎日新聞に「残したい方言」というコラムを執筆した。その中で、正岡子規の「福引のわれ貧に十能を得たり」という句を引いて、「十能」を扱った。その際に、下高井郡山ノ内町出身の妻が、「火の気のないこたつ」について「芝居のこたつ」というたとえを用いていることに触れた。すると、多くの読者から「火の気のないこたつ」のさまざまなたとえを教えていただいたというものである。「芝居のこたつ」というのは、言い得て妙な表現ではあるが、これは、その家庭に特徴的なたとえであると考えていた。しかしながら、読者からの情報で、山ノ内町あるいはそれに隣接する中野市で、同様の表現を用いていることが分かった。これは、たとえには地域性があるということである。

1.2.2 「火の気のないこたつ②」

信濃毎日新聞の読者から送られた「火の気のないこたつ」をたどった表現を掲げてみる。

○芝居のこたつ 山ノ内町、中野市

○水の出るようなこたつ 須坂市

○カエル(蛙)が飛び出すようなこたつ 辰野町

○ドジョウ(泥鰌)が出るようなこたつ 飯田市、大町市

○ガニ(蟹)が出そうなこたつ 原村

○カ(蚊)のわくようなこたつ 上田市

また、2018年1月27日に行ったりバティカレッジ上田女子短期大学「信濃のこたつ(その2)」で講演させていただいた際に、出席されていた方から次の表現を教えていただいた。

○ガニ(蟹)が出そうなこたつ 上田市(小泉・小牧・旧真田町)

○尻をひったようなこたつ 上田市

○カエル(蛙)が飛び出すようなこたつ 松本市

多くは、「水」を連想させる、または水と関連の深いたとえである。こたつは炭火が

一般的であった時代において、水と関連した表現が多いことが注目される。

1.2.3 「火の気のないこたつ③」

この「火の気のないこたつ」が、物語性を持った言語作品としてとえられている例を得ることもできた。

「ぬるいこたつは満照寺」(注4)

満照寺：千曲市にある曹洞宗の寺院

加賀前田公の参勤交代の時のことである。満照寺は御天領にある寺であったため、前田公も参勤交代のおり、しばしば立ち寄った。御天領には馬や駕籠では入れないため、夏の暑さなか徒歩で参拝された。すると時の和尚は「夏のこたつ」を勧めた。御天領和尚の言うことなので断れずに、足を差し入れるとこたつの中は涼しく長旅の足の疲れも吹き飛んだ。中を覗くと真っ赤な炎が見えているが、よく見ると、そこには朱塗りのお椀が伏せてあった。頓知のきいた計らいに感動し、「ぬるいこたつは満照寺」として世間に紹介された。

「蕃松院の冷えごたつ」(注5)

蕃松院：佐久市にある曹洞宗の寺院

明治の初めころ、お寺の役員さんたちが集まって会合を開いた。その当時のことなので、暖房はこたつしかない。そのこたつにみんながあたって会合することはできない。そこで、やぐらを並べて、ふとんを掛け、みんながその中に足を入れて会合をした。せめて見た目だけでも暖かくしようということで、熾きのないところは赤いお椀を伏せて置いた。これはけちでやったことではなく、仁王門と土蔵を造ろうとした時点で、檀家の皆さんが節約していたというのがその理由である。

現在でも、「火の気のないこたつ」を「おこた満照寺」あるいは「蕃松院の冷えごたつ」と呼んでいるという報告をいただいた。「物語」は時間の経過に伴い、少しずつ変化しているかも知れないが、その地域の方々にとっては、論理的な根拠になっており、今後残ることが予想される。

2.1 「ことわざ」

ことわざは、倫理的で人生の真理をつくような言語作品と言える。短いことばを駆使し、真理をズバリと言い当てているところに特徴がある。

このような特徴のため、地域との密着度が高く、時には、俚言を用いたことわざが使われるということもある。

ここでは、地域性の強いことわざを取り上げる。

2.2 俚言を用いた「ことわざ」

井上福實編『信州下伊那郡方言集』(1936)には、つぎのことわざが載る。

○ズクナシの七所がかり：ズクナシ(=怠け者。働くことが嫌いな人)は、いろいろと手を出したがる。

○ズクナシは隣の御器を洗う：ズクナシは、自分の家ではあまり仕事をしないくせに、他所へ行くとズクのある人のように見せかけてよく働く。

遠山信一郎編『遠山のことば』(2004年)には、つぎのことわざが載る。

○ノッポのひーみだおし：ノッポ(=怠け者。仕事の嫌いな人)が、ひーみ(=祭り、節句などの休日)でみんなが休む時に働くこと。

また、和田登『信州暮らしのことわざ』(2015 しなのき書房)には、つぎのことわざが載る。

○オーズクありのコズクなし：細々したことは何もせず、のんびりしていたと思ったら、世間がびっくりするような大仕事を成し遂げること

○ズクナシのオーカンガラ：大足の人はずくなしだ

○ズクナシのオーダクミ：ろくに仕事もできないくせに、自分の力も顧みず、大きなことを計画すること

○ノーナシの節句働き：いつも怠けて働かない者が、休日に限って働くこと

○猫と馬鹿はヨコザ：しきたりをわきまえない馬鹿者はヨコザ(囲炉裏の座名で「上座」にあたる)に座る

俚言を用いたことわざが「方言集」に載ることはあまり多くない。採録が急がれるところである。

2.3 「雨の前兆」を言い表す「ことわざ」

天候の予想は生活する上でも、仕事をする上でも大変重要な要素となる。現代は、

かなりの確率で天気予報が当たるため、それにしたがって行動することができるが、今ほど天気予報が確立していなかった時代においては、人々は何気ない自然現象の中から天気予報をすることが常だった。したがって、それぞれの地区で、独特な予測の仕方が生まれた。

2.3.1 上田地方における「雨の前兆」を言い表す「ことわざ」

上田市内で全般的に言われているものは次のものである。(注6)

○太郎山に逆さ霧がかかると雨になる(市内全域)

これは、太郎山が市内のほぼ全域から見えることと、太郎山が上田市のシンボリックな山であることによるのだろう。

一方、地域ごとにシンボルとなる山があり、それが違った「ことわざ」を作りだしている。

○弘法様に雲がかかると雨が来る(下堀)

○倉升山に笠雲が出ると雨が降る(下之条)

○陣屋の峰が曇ると必ず雨が降る(須川)

○梅の木峠に笠雲がかかると雨が降る(野倉)

○城山に紐みたいな霧がかかると雨が降る(下室賀)

また、天気が変わる前兆として風向きが変わることが多いので、普段はあまり聞こえない音が聞こえてくることで、天気の変り目を占う「ことわざ」もある。

○汽車の音がよく聞こえると雨(森・岩門・中吉田・野竹・下郷など)

○八日堂の鐘が聞こえると天気が変わる(野竹)

これらの地域からみると西側に線路(旧信越本線・現しなの鉄道)や八日堂(信濃国分寺)があることから、「西風が吹くと天候が変わる」ということを言い表しているものと思われる。

また、全国的に「猫が顔を洗うと雨が降る」という言い方が見られ、これは上田市全域にも使われている。ただ、これにも少しずつ違った言い方が用いられている。

○猫が耳から顔をこすると雨(岩門)

○猫が耳をヨーク(よく)こすると雨が降る(須川)

○猫が耳を3回こすると雨が降る(下組)

○猫が耳を搔くと天気が崩れる(上塩尻)

○猫が耳の後ろを搔くと雨(仁古田)

さらに、「ことば遊び」的な要素を持つ「ことわざ」として次のような表現が全国的に行われている。

○朝日のチャッカー、姑のニッコリ

これは、姑がニッコリしているのは、何か魂胆があるはずだということを、朝日が照っていることと掛けたものである。朝焼けは天気が崩れるという傾向を、音のおもしろさと対比のおもしろさを用いた巧みな表現と言える。

夕立にかかわる表現も多様である。

○虚空蔵山から来る雷は危険(上塩尻・秋和)

○別所方面から来る夕立はすごい(下之条)

○烏帽子からの夕立はオッカネー(恐ろしい)(中吉田・下郷)

○浅間夕立音ばかり、四阿山から来る夕立はひどい(殿城)

また、夕立を他の事物と対照させたおもしろい表現もある。

○夕立と騒動は青木から(下之郷・仁古田・踏入)

○別所の雨と隣のぼた餅は必ず来る(踏入・野竹)

○別所の雨と隣のぼた餅は来そうで来ない(舞田・山口)

○隣のぼた餅と太郎山の夕立は来たことがない(小牧)

このうち、夕立とぼた餅を関連させた言い方は、次のことわざがもとになっていると思われる。

戌亥の夕立と伯母御のぼた餅は来ぬためしなし(『成語林』旺文社)

2.3.2 上伊那地方における「雨の前兆」を言い表す「ことわざ」(注7)

上伊那地方で使われている「雨の前兆」を言い表す「ことわざ」を挙げておく。

○西山に雲がかかると天気が悪くなる

○経ヶ岳に雲がかかると雨になる

○陣馬形に雲がかかると雨が降る

○西駒に霧がかかれば天気が悪い

○守屋山からの夕立は大雨になる

○守屋山から西駒にかけける雷はすごい

○守屋山の方から来る雷は怖い

いずれも、上伊那地方におけるシンボリックな山を用いた表現となっている。

2.4 「雪の前兆」を言い表す「ことわざ」

「雨の前兆」同様に、「雪の前兆」を表すことばも、それぞれの地区で独特な予想の仕方が生まれた。『長野県史民俗編』には、それぞれの地域の「雪の前兆」を表すことが採録されているが、例えば、次のような言い方があるという。(注8)

○高社山に三度雪が降ると里にも降る。(北信)

○烏帽子岳に三度雪が降ると里にも降る。(東信)

○四阿弥山に三度雪が降ると里にも降る。(中信)

○八ヶ岳の峰へ三度雪が降ると里へも降る。(南信)

このように、その地域における主要な山に「三度降る」という前提を用いる点に共通したものがある。ここにも言語作品として使われていることを認めることができる。

また、全県に広く用いられている表現が次のものである。

○ミソサザイが鳴くと雪が降る。

ミソサザイは、ミソッコ、ミソッチョなどの県内では多くの方言形を持つ鳥である。多くの方言を持つことから、県内ではなじみの深い鳥ということができよう。ただし、ミソサザイの地鳴きは春先とされていることから、なぜミソサザイなのかについては調べてみないとならない。

2.5 「方言差」を言い表す言い方

「京へ筑紫に板東さ」

これは、方向を表す格助詞の方言差を言い表したものとして有名なものである。

県内でも、これに類する表現を見つけることができる。

○上田オンクレ 坂城はオクレ なぜか松代クダシカレ

これは、「～ください」の方言差を言い表したものである。「なぜか」に、松代のことばに対して、「独自性」を感じていたことを認めることができる。同様のものに、次のものがある。

○中野ヨックヨック 須坂はシッシ なでに松代クダシカレ

中野のヨックヨックは、「ヨックヨック やだくなった(=よくよく嫌になった)」のように使うことばであり、須坂のシッシは「じゃんけん」のことである。ここでは、まっ

たく異なる意味のことばを並列させ、その上で、松代のことばの独自性を示している。
ここにも言語作品としてのおもしろさを認めることができよう。

3 おわりに

ここまで述べてきたことは、長野県方言における「たとえ」「ことわざ」「言い回し」の部分的な記述である。

今ほど、情報が発展していなかった時代において、人々は日常の生活の中から得られる情報を駆使して物事を判断していた。その情報が日常生活から得られるものである以上、身近なものでなければならなかった。そこに地域差(=方言差)が生じることは当然である。

すると、俚言以上に文化が反映されているとも考えられる。

この分野の体系的な記述をすることで、その地域にすむ人々が、何に注目し、何を大切に生活してきたかが分かるはずだ。

記述を急がなければならない分野の一つであろう。

(注1) 柴田実(2002)『「二一世紀に残したいふるさとのことば」の記録』(NHK放送文化調査研究年報46)

(注2) 馬瀬良雄(2003)『信州のことば 21世紀への文化遺産』(信濃毎日新聞社)pp.118

(注3) 清水はるな「駒ヶ根市の中学生約250人の方言と方言意識」(長野・言語文化研究会での口頭発表 2016年2月7日)

(注4) 読者からの投稿に基づき、「いわれ」の概要を記す。同寺のご住職に確認し、内容については確認を得た。

(注5) 読者からの投稿に基づき、同寺のご住職より「いわれ」をお聞きした。

(注6) 出野憲司(2003)「上田市誌民俗編(4)昔語りや伝説と方言」(第二章 口頭伝承二
なぞ・ことわざ (2)ことわざ) ()内は、採録した地点の字。

(注7) 出野憲司(2003)「方言と国語教育(3)－身近な「ことば」を授業に取り込む試み－」

(日本私学教育研究所紀要No38-(2))

(注8) 同書には採録地点名が記載されているが、ここでは省略する。

(引用・参考文献以外のものを挙げる)

【参考文献】

馬瀬良雄(2013)『長野県方言辞典(特別版)』信濃毎日新聞社

出野憲司(2013)『残したい方言』信濃毎日新聞社

出野憲司(2016)『残したい方言Ⅱ』信濃毎日新聞社